

『愛には恐れがない』井上隆晶牧師

ヨハネの手紙一 4章16～21節、ヨハネによる福音書 15章12～19節

①【神がまずわたしたちを愛された】

今日はヨハネの手紙から学びましょう。このヨハネはよく「愛の使徒」と呼ばれます。それは彼の手紙の中に「神は愛です」（Iヨハネ4:16）という有名な言葉が出て来ることや、神の愛についてのたくさんの表現が出て来るからです。今まで神をこのように表現した者はいませんでした。だからこそ「愛の使徒」と呼ばれるのです。今日、読んだ手紙の中で私が一番重要だと思う箇所は、19節の「わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。」（Iヨハネ4:19）ではないかと思えます。今日読みませんでしたが10節にも同じような表現が出てきます。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」あなたがキリストを愛したのではなく、まずキリストがあなたを愛したのです。それがあなたの物語の始まりなのです。そこから私たちの隣人愛が生まれて来るのです。なぜ、この箇所が大事かという、神の愛が先にあるということをよく私たちは忘れるからです。忘れるとどうなるかという、人間の愛や人間の業にウエイトが置かれるようになり、だんだん信仰が律法的になってきて、隣人愛も人間の力でするようになってくるからです。

ヨハネは「私たちは、私たちに對する神の愛を知り、また信じています。」（Iヨハネ4:16）と書き、「愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。」（同4:16）と書いています。

●昔、子どもの時「障地取り」という遊びをしました。地面に線を引いて、この線内は自分の障地なので安全なのですが、ジャンケンに負けると障地を取られ、障地が減っていつてしまう遊びです。これと同じで、この神の障地の中にとどまることが大事なのです。神の障地とは神の愛の支配であり、その愛の支配の中から出ないことです。

すなわち、神の自分に対する愛を決して疑わないということです。神に愛されていれば大丈夫、安心だということ。そのように神を信じれば、神もその人の内にとどまって下さるといふのです。信じないとなぜ、神はその人の内にとどまれないのかという、信じるということは受け入れるということだからです。信じないということは相手を受け入れないことなので、神も入れないのです。ヨハネは自分は神の愛を信じ、その愛を受け入れていると言っているのです。

17節に「愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。」とあります。「愛が全うする」というのは英語では「Love is made complete among us」です。「愛が私の中で完全になっている、愛が私の中に満ちている」という意味です。神の愛を信じているので裁きが怖くないということ

言っているのです。だから次の有名な言葉が出てくるのです。「**愛には恐れがない。完全な愛は、恐れを締め出します。**」(同4:18)

●若い時に、相手が自分のことを好きだと言ってくれた時の嬉しさと心のドキドキ感を思い出してみてください。相手の愛が分かった時の、私たちの心は何と喜びに満ちていたことでしょう。昔、ロシア正教千年祭というNHKドキュメンタル映像を見たことがあります。その中で修道士が、頬を真っ赤にして何とも嬉しそうに、キリストを恋人であるかのようにこう語っていました。「恋人がいつも相手のことを考えているように、私たちはいつもキリストのことを考えているのです。私たちはキリストに似た者になりたいのです。たとえなれなくても、なろうと努力したことは認められるのです。」

ですから「**愛には恐れがない**」というのとは、あなたの愛のことではなく、キリストの愛のことです。キリストの愛を知った人には恐れが無くなるということを言っているのです。とにかくキリストの自分に対する愛を決して疑わないことです。キリストに愛されていれば大丈夫、安心だと思ふことです。

②【私はキリスト教徒になるように任命された】

ヨハネは福音書の中でも選びという言葉に変えて、神の働きかけが先であることを書いています。「**あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。**」(ヨハネ15:16)

ここにも信仰の始まりは、私たちではなくて神の側であることが書かれています。なぜ、私たちがキリスト教徒になったのか、それはキリストが私を選び、任命されたからです。私が立派であるかどうか、私が真理を求める人間であるかどうか、私に能力があるかどうか関係ないのです。キリストがまず、私を御覧になり、なぜか選んだのです。「任命」という言葉が出てきます。英語では「appointed」です。「定める、指定する、任命する、天が命ずる」という意味です。神様から私たちはキリスト教徒になるように任命された、キリスト教徒になるように定められたのです。そのキリストの選び、任命、呼びかけに私がどう応えるかです。ある人にとっては「迷惑だ」「私には他にすることがある」と思う人があるでしょう。礼服を着ないで婚宴に来た人もそうだったのでしょ。道を歩いている時に、突然呼び止められ、礼服を差し出され、王子の婚宴に行くように命じられても、彼には彼の都合があったでしょう。だから腹を立て、礼服を着なかったのです。彼は言うでしょう。「え！忙しいのに、何で私がそんな仕事をしなければならないのですか。」しかし、反対に心の貧しい謙虚な人たちはこう答えるでしょう。「え！私のような者がそんな立派なお仕事をさせてもらえるのですか？何ともったいない。」皆さんは、どちらのセリフが口から出てきていますか？ユダヤ人は前者だったので、選びは他の民族に移されてしまいました。故にペトロは言います。「兄弟

たち、召されていること、選ばれていることを確かなものとするように、いっそう努めなさい。」(Ⅱペトロ 1 : 10)

③【私たちが誇れるのはキリストだけである】

●先週、天理教の本部を見学に行きました。まだ 180 年しか経っていないのに、その建物の巨大な事、立派な事、畳だけで三千畳あります。そこに集まる信者さんのよくできている事、その奉仕の実に立派なことを感心しました。「ひのきしん」と言って、本殿の廊下を雑巾でピカピカに磨き、掃除するのです。若い人も高齢の人も熱心に祈りながら歌いながら汗を流してやっていました。また日本中の天理教の教会から本殿に帰ってきた時に宿泊出来るように 160 もの宿泊施設が本殿の周りに建っています。例えば青森の教会の信徒たちは、青森の教会と、天理市に宿泊施設の二つを建てなければならないのです。大変な献金です。一言でいうなら、天理教徒は大したもんだと思いました。それに比べてキリスト教徒の無力さを感じました。パウロが言うようにキリスト教徒は病人や、貧しい人や、問題のある人が多いのです。また議論ばかりで、他人のために奉仕するという精神が弱いように思います。ガンジーが言った通り、「キリスト教は良いが、キリスト教徒は駄目だ」です。

イエス様は弟子たちに「あなたがたは世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」(ヨハネ 16 : 33) と言われました。私たちにも勝利というものがあるのなら、それは私たちがこの世で何かを成し遂げたからでもなく、何かを残したからでもなく、社会の問題を解決したり、立派な生活を送ったりしたからではありません。私たち人間の行う正義の業、愛の業などしています。そうではなく、キリストが私たちが愛しておられるから、もう勝ったようなものなのです。それしかないなあとつくづく思いました。私たちの神様は変わっていますよ。本当に無力な者、無に等しい者を選ばれ、愛されたからです。誇るべきはキリストであり、私たちには一切誇るものではありません。「誇る者は主を誇れ。」(Ⅰコリント 1 : 31) です。私たちが弱ければ弱いほど、キリストの愛のすごさが見えてきます。こんな私たちがまず愛して下さったキリストを喜びましょう。そして少しでもあの方に似た生き方ができますように祈りたいと思います。